

あるヴィクトリア婦人の肖像（2）¹⁾

—— レディ・シャーロット・シュライバー：
真の貴婦人の生きかた (noblesse oblige) を追って——

(ロマンスと収集と)

中野節子

熱情あふるる，気高い貴婦人—
美しくも，神々しい御方，
その心を燃やす思いは，我らのこの世での成功
そして我らの生活の利益。

これはメルスィル・テドヴィル (Merthyr Tedfil) の印刷業者リース・ルイス (Rees Lewis) に
よって書かれ，小さなカードに印刷された，シャーロット・ゲスト夫人 (Lady Charlotte Guest) を
讃える12連の詩の中にうたわれている，一人の貴婦人の姿である。

中世散文物語文学の華，ウェールズの幻想物語集『マビノギオン』(*The Mabinogion*) の，実質上
最初の英訳者としても知られるレディ・シャーロット (Lady Charlotte : 1812-95)，この一人のヴィ
クトリア婦人の生涯は，真に興味深い。初代がエリザベス一世とエセックス伯を教父母にもつとい
う，古い伝統を誇るリンカンシャーの貴族の娘として生まれながら，産業革命の嵐の吹き抜ける時
代の只なかで，自分の二倍以上も年上の，南ウェールズの町ダウレス (Dowlais) の鉄鋼王J. ゲス
ト氏 (John Guest : 1785-1852) と結婚し，10人の子どもを育てつつ，夫の片腕として事業を切り盛
りする。夫の死後はその後を継いで大きな工場の経営を一手に引受け，一方では社交界の生活を続
けながら，子どもたちをそれぞれ，社会の指導的階級にある人物と結びつけている。1902年の新版
の序文で，A. ナット (Alfred Nutt) によって，「最高に洗練された『アラビアン・ナイト』の物語
を除いては，世界に類を見ない妖精物語 (fairy tales) と評された『マビノギオン』の翻訳の仕事
も，決して片手間のやっつけ仕事などではない。彼女のこの英訳は，当時台頭してきたロマン主義
復興運動の流れに投じ，イギリス本土を始めとして，広くヨーロッパ各地で，その後多くの民族主
義の香り豊かな作品を生み出す基となった，優れた文学作品としての評価を受けているのである。

またレディ・シャーロットの生涯は，ゲスト夫人としての前半生に留まらず，第二の夫となった
シュライバー氏 (Charles Schreiber : 1826-84) と共同の，収集家としての後半生にも見るべきもの
がある。14歳年下のシュライバー氏との結婚は，十二分に幸せなもので，二人は共にヨーロッパ各
地を旅行し，蓄積した財力を使って，陶磁器やカード，そして扇等を集めて回る。このコレクショ
ンは，自らしたための克明な説明付きのカタログと共に，ヴィクトリア&アルバート博物館と大英
博物館に寄贈され，我々の目を楽しませてくれている。しかもこれらの収集物は，ただ単に美術品

としての価値を持つばかりでなく、歴史と社会を知る上での、大切な文化遺産としての評価も受けているのである。

イギリスの名門貴族の娘に生まれ、ウェールズの実業家の妻として過した彼女の前半生は、鉄とロマンスを追って生きた日々として総括されよう。根底でこの希有な婦人を突き動かしていた衝動の一つには、自分の持てる能力を発揮したいという自己実現の野心と共に、イギリス貴族社会の伝統的モラル、高い身分に伴う精神的義務 (noblesse oblige) を遂行しようという意識が、絶えず強烈に働いていたことは確かである。そんなヴィクトリア上流階級婦人の活躍のさまを、彼女の信条であった、この倫理観に焦点を当てて、考えてみたい。

Ⅰ. ウェールズの地での活動の中で

—教育に夢を託して—

シャーロットの最初の結婚相手であった、鋼鉄王 J. ゲスト氏は、1826年にホニトン (Honiton) の議員となったことを皮切りに、1832年には、改革議会のメルスィル・テドヴィル選挙区の初代国会議員となり、また1838年には男爵にも列せられ、ロンドンとダウレスを往復する忙しい日々を送っている。哲学的急進主義者として活躍していたスコットランド人ジョゼフ・ヒューム (Joseph Hume) と共に、地方の急進主義者として、社会改良の政策を積極的に推進してゆく政治家としての側面も持っていたからである。そんな夫と共にロンドンに出かけ、議会の傍聴や社交の生活を精力的に展開していたシャーロットは、次第に政治に興味を示し、後に首相を務めたパーマストン (Henry John Palmerston : 1784-1865) の演説を、「詩と真実の表現」と呼んで絶賛している。こうして男子普通選挙権を要求する6カ条を掲げて、人民憲章 (People's Charter) の通過を議会に迫ったチャーティスト (Chartist) たちの考えの一つ、自己教育の大切さに共鳴した夫妻はそれぞれに、ダウレスの町の教育の促進に力を注ぐことになる。専ら上級の少年たちの能力の開発に努力した夫とは反対に、夫人の関心は終始幼児教育と成人学校の開設にあった。彼女の提案で、学期の終わりには、成績と勤勉を讃える様々な賞が子どもたちに与えられ、彼らの勉学意欲をかき立てる工夫がなされていた。また1848年には、従業員の若い婦人たちのための、ウェールズで最初の夜学が開設された。しかし興味深いことに、夫人の教育の目標としたところは、ウェールズの子どもたちが、自らの言葉ウェールズ語と歴史、そしてその文化の伝統を学ぶことにはなく、専ら英語の学習と英語の背景を学習することに終始していたということである。この姿勢、即ち教育の目的は、英語を自由に使える良き帝国市民を作ることにあるという、彼女の揺るぎない信念は、1847年に発表された、偏見と独断に満ちたウェールズ地方に関する政府の教育報告書 (一般にその体裁から、「青い本」 ('Blue Books') と呼ばれている) と共通する考え方であった。一方、夫人の抱いた教育の普及という理想、「議会の法案では、人々を善良に信仰深くすることはできないと思います。最初の第一歩は、彼らを心地よく、幸せにすることなのです」という願いの背後で、1848年のメルスィルの死亡率はウェールズ最高となり、1854年にはコレラの再発という事態も起こっていたことも事実である。これは理想とは程遠い、実生活上での改善の遅れが如実にうかがわれる、皮肉な現象であると言えよう。しかし1852年の夫ジョンの死を迎える以前に、自分の財産を投与しての、メルスィルの3校を含む6つの学校が、既に設立されているのである。全てウェールズの地に住む人々の、明るい未来を夢見ての、献身の結果であった。

シャーロットの必死の看病もむなしく、「魂のパートナー、わたしのアイドル」と評されたゲスト氏が亡くなるのは、1852年11月26日のことであった。しかしこのような悲劇の24日後には、早くもシュライパー氏の到来が、シャーロットの長年記し続けた、生涯の友ともいえるべき膨大な日記

(ジャーナル)に記録されている。それはケンブリッジ大学入学に備えての、長男アイヴァー(Ivor)の家庭教師としての訪問であった。

1826年5月10日生まれ、軍人の息子であるシュライバー氏は、当時26歳、全部で15個の優等メダルを獲得する、ケンブリッジ大学トリニティーの学寮生、息子アイヴァーのためにこの家庭教師を紹介してきたのは、奇しくも、シャーロットの養父ベガス師(Rev. Peter William Pegus)であったのである。若いシャーロットの最初の恋人、家庭教師F. マーティン氏(Frederick Martin)も、この養父の紹介であったことを思い起こすと、何か不思議な運命の糸のような因縁を感じざるをえない。こうしてゲスト家にやって来たシュライバー氏とシャーロットは、彼女が夫を失ったと同じ年に、シュライバー氏もまた、双子の弟ジョージ(George Alfred)を亡くしているという喪失の奇遇と、彼がゲスト家滞在中に罹った病気を、シャーロットが献身的に看病するといった事件等も介在して急激に接近し、翌54年の4月頃には、ジャーナルへの記述も、シュライバー氏からチャールズ・S、ないしは単にCと記載されるようになり、次第にチャーリーという愛称へと変わってゆく。1837年11月には既に作成されていたジョンの遺言に従って、夫の死後は唯一の女性遺言執行者、財産管理者、子どもたちの保護者としての仕事をこなすシャーロットの肩には、重い責任がかかっていたに違いない。そこには、ヴィクトリア朝婦人の喪のエチケット、黒色のクレープの衣装と未亡人の被る帽子とヴェイルをまとい、装飾品は一切身につけず、内外の問題の処理を精力的にこなす一人の女実業家兼母の姿があった。しかし当時台頭しつつあった、近代的事業経営のスタイルは、古き良き倫理を遵法する彼女の道徳観とは到底相入れないものであった。権利と義務を追求する労使関係の始まりを象徴するようなストライキの勃発は、1853年の7月21日のことである。「労働者と経営者の利益は同じである」と主張するシャーロットは、彼らとは話し合うが、秩序は毅然として守るという姿勢を貫き通した。9月1日のジャーナルには、「神に感謝を捧げます。一私の生涯での絶えざる悩みであった、このストライキが終わりました。」と記されている。こんな苦境の中でのシュライバー氏の存在が、シャーロットの心を慰める、唯一の安らぎであったろうことは容易に察しがつく。また突然の病気に見舞われたシュライバー氏に付き添って、献身的な看病を続けるシャーロットの心の中には、夫ジョンの病気を看取った日々の思いが蘇っていたに違いない。それと同時に、母方のレヤード(Layard)家の血筋に流れる、ロマンスを求める生来の気質が沸き上がり、若い少女の頃の家庭教師マーチン氏への苦い初恋の思い出もまた、蘇ってきたのではなかろうか。まさに運命の導きを感じさせるようなこの出会いに、四十代に入ったばかりの、自信と経済力を身につけた未亡人の心は、激しく揺れたことであろう。彼女のジャーナルの中に、チャールズ・シュライバーへの言及が増えるにつれ、前夫ジョン・ゲストへの記述が少なくなってゆく。これはシャーロットの持っていた、現在と未来を大切に考える性向を如実に示すところである。過ぎ去ったものを大切に慈しむ貴族的な感情と共に、現在と未来を常に優先する庶民のエネルギーのようなものの共存が、この一人のヴィクトリア朝婦人の身上でもあった。亡き夫の一周忌を迎えた頃、墓石の傍らに膝まづきつつ、「これ以上何を言ったらよいでしょう！ 今私の心には一つの願いもなく、熱い思いを以て、私はその願いを、粘り強く抱きつづけているのです。」と記している。そして1854年の12月の中頃には、「この世で私が望む全ては、静かな、慎ましい規模の個人的な生活へと引退することなのです。」という希望も記しているのである。しかしながら彼女の思いが深まってゆくにつれて、周囲に様々な問題が起こらなかつたわけではない。シャーロット本人の心の葛藤に加えて、既に成人に達している子どもたち、中でも長女マリア(Maria)との間に起こった摩擦も、かなり大きかったことが察せられる。1854年12月から55年4月にかけてのジャーナルの空白は、後にシャーロット自身が、「ちょっとした場面が展開されたのです。」と言っているように、彼

らとの間での、様々ないさかいの存在を物語っている。しかしながらシャーロットの再婚の決意は固く、1855年4月10日、二人はロンドンで結婚した。

Ⅱ．旅に明け暮れる第二の人生で

—シュライバー夫人として—

若きシュライバー氏とのこの再出発を、シャーロットは、「生き生きとして、若く、清らかで、興味に満ちた美しい人との生活のスタート」と表現し、パリへの新婚旅行では、「とても言葉には言い尽くせない幸せを噛みしめている。」と記している。

しかし「お互いの愛情によって、すっぽりと包まれているよう。」と表現された新婚の幸せにも、全く問題がなかったわけではない。その年の後半のジャーナルの筆は、思いなしか滞りがちである。それはシャーロットの流産にあったと推定される。その後も彼女は再度の流産を経験し、1858年8月の三度目の流産で、二人の間で子どもが生まれる可能性は完全に絶たれてしまった。一方ゲスト家の子どもたちは、長女マリアが1859年に結婚したのを皮切りに、それぞれ独立した生活を始めるようになった。他方では、シャーロットの気持ちを痛める最大の出来事も起こっている。それは、1862年5月23日、幼いときは『マビノギオン』の中の物語の主人公の一人、「ゲライント」(Geraint)という愛称で呼ばれていた6番目の子ども、オウガスタス・フレデリック (Augustus Frederick) が、21歳の若さで早世したことである。

1857年8月30日、ゲスト家の長男アイヴァーの成人を祝う宴が、盛大に催された。朝6時、イギリスの国歌が奏された後、大勢の客人たちが帰った後のカンフォード (Canford) の館の様子を、シャーロットは次のようにジャーナルに記している。

「… 今や全てが終わりました、賑やかな音も消え、楽しげなお客さまの姿もありません。チャールズと私は、広々と、空虚で、静寂が漂う広間に、取り残されています。私の時代 (reign) が終了し、無数の思いと感情が、一斉に心に蘇ってきました。どっと涙がこみ上げてきます。するとあの人の優しい両腕が私に回され、その胸にいとおしく引き寄せられて、次の瞬間、私の弱気は克服されました。私たちは一緒に庭に出て行き、朝の清々しい空気の中、テラスを歩き、私は生き返ったように感じていました。」

1857年以来シュライバー夫妻は、ロウハムプトン (Roehampton) のエクセター・ハウス (Exeter House) に移り住み、やがてシュライバー氏は、65年にチェルトナム (Cheltenham) の国会議員に選出され、政治家としても活躍するようになった。ゲスト氏の遺言によって、シャーロットには4000ポンドの年金が送られ、氏の所有する家に住まない場合には、加えて6000ポンドの援助が約束されていた。その資金を背景に、シャーロット自身の生活も、生産性と効率を最大に重視した今までの実業家のものから、貴族階級のスタイルへと変化してゆく。一見趣味と余暇を楽しむ優雅な生活と思われる、有閑夫妻の生活—しかしそれとても、シャーロットの心に宿った壮大な野心—すなわち今までに培ってきた自らの鑑識眼と財力の全てを掛けて、第一級のコレクションを作り上げ、夫シュライバーの名前を冠して、最高の博物館に寄贈すること—に、まさしく骨身を削って勤しむ日々であったのである。それまで克明に綴ってきたジャーナルの性質にも大きな変化が表れている。1863年ころから滞りがちであった、細々とした日常生活の記述の代わりに、1869年頃からは、収集旅行への携帯に便利な、小型の、柔らかい表紙のメモ帳式に様変わりしたジャーナルへの、コレクションの覚書といった記述が登場してくるからである。これは1860年代から積極的に始まった、彼女の収集の生活を暗示している。シュライバー夫妻は、70年代には、しばしばヨーロッパ大陸を旅行し、主としてイギリスの磁器類を集めて回っている。やがて優れた買い手として知られるに止ま

らず、次第に商売を拡張していったクリスティー、サザビー、フィリップス、そしてボナム等のオークショナーからも、商品の買い付けを頼まれたりするほどの、専門家はだしの目利きとなっていった。愛するシュライバー氏との磁器を求めての旅、それはシャーロットにとって、イギリス陶磁器の歴史を辿るという、壮大なロマンを追う旅でもあったのである。最初のゲスト氏との旅が、鉄とアーサー王を初めとした中世のロマンを追う旅であったことを考えると、終始このヴィクトリア婦人の心を捕らえて放さなかった強烈な憧れ、遠いロマンを求めての旅の様子が、生き生きと目に浮かんでくる。かつてシャーロットは25歳以上も年上の夫ゲスト氏との商用の旅に同行しながら、コンウォールではアーサー王の誕生にまつわるエピソードの地を巡り、またスコットランドでは鉱山や溶鉱炉を視察した後、ホーリルード（Holyrood）宮殿やアーサー王のテーブルやW. スコット（Sir Walter Scott : 1771-1832）の物語の故郷を訪れ、ドイツではハルツ（Hartz）の鉱山を見た後、シャルルマーニュ（Charlemagne）の墳墓等を訪れたりしている。今はまた14歳年下の夫シュライバー氏とヨーロッパ中を巡る磁器収集の旅を続けながら、「店から店を回って、私たちはこの追跡を、まるで一つのゲームのように楽しんでいきます。」と記しているのである。そしてシャーロットは、この追跡ゲームの行き着く果てに、膨大なコレクションを通して、シュライバーの名前を永遠に留めるといふ、大きな夢を描いていたと思われるのである。かつての彼女は、南ウェールズのみならず、世界最大の製鉄所を切り盛りする女実業家シャーロット・ゲストであった。そんな彼女の背景には、イギリス上流社会に君臨した祖先の血筋をひく、レディー・リンゼイとしてのプライドと使命感が常に存在し、その行動を導いていたことは確かである。今また彼女は、歴史（ロマン）を追い求める憧れと、プロの目利きとしての鋭い勘を駆使して、収集の旅を続けている。やがてこのシャーロットの目論見は、見事に実現してゆくのである。しかし夢のように幸せな、二人の旅の日にも終わりが訪れた。1884年3月29日、長らく結核を病んでいた最愛の夫シュライバー氏が、医者のお勧めでおこなっていた船旅の末、南アフリカからの帰国途上のリスボンで、58歳という男盛りで客死したからである。「これでわたしの地上での命は終わりました。」と記す失意のシャーロットは、直ちに長く抱きつづけていた自分の計画を、実行にうつす。二人で収集した大量の陶磁器のうちの最高のもので、サウス・ケンジントン博物館（後のヴィクトリア&アルバート博物館）に寄贈するのである。それらは、シュライバー・コレクションとして、139室に展示されている、2000点にもおよぶ、イギリス陶磁器とバターシー・エナメルの大コレクションである。

「これから先は、辛抱強く、頭を深くたれ、働き、そして憐み深い神さまが迎えてくださるのを待ちたいと思います。」と綴ったシャーロットのその後の生活は、専ら扇と扇面のコレクションのカタログ作りと、プレイング・カードのコレクションの整理に没頭するものとなった。何れも小道具を通して、上流社会の様子と変遷のさまを如実に物語るコレクションである。中でも1727年という古いものから、政治的な風刺画が印刷されて用いられるようになった19世紀の扇面に至るまでの扇のコレクションは、大英博物館の二人の人物の協力を得て、克明な記述を付した5巻のフォリオ版のカタログが完成されると、1891年、同博物館に寄贈されている。また占い、骨相学、仕掛けものに止まらず、チューダー&スチュアート王朝時代の反カソリックの感情を見事に写し取っている政治的なもの、そして植民地を拡大していったイギリス帝国主義の気運を象徴するかのような地理の学習用のもの等、イギリスの歴史と社会を理解する上でも興味尽きない、プレイング・カード類の大コレクションもまた、同様に大英博物館に寄贈されている。

Ⅲ．イギリス上流階級の貴婦人としての後半生で

—コレクションに没頭して—

人は何故、物を集め、分類し、展示して見せたいという欲求を持つのであろうか。なかでも世界中から集められた、優れた文化遺産の結集とも言うべき、大英博物館の収集を見ると、イギリス人という民族の持っている、本能的収集マニアの性質を感じずにはいられない。彼らのこのような性向は、一体どういう特質からくるものであろうか。マルコ・ポーロの東洋への旅から端を発して、ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰発見、コロンブスの世界一周の冒険旅行等、イタリア・スペイン・ポルトガルを中心として展開された大航海時代を経て、一斉に世界へ目を向けるようになった欧州の大国は、様々な地理上の発見を繰り返す。やがていささか遅れを取った感のあるイギリスも、スペインの大艦隊を破り、ナポレオンの軍隊を退けた後、政治的にも安定し、世界中に遠征しての経済的発展を謳歌するようになる。後進国イギリスが、台頭してきた商人たちを中心とする、市民階級の人々を中心となって展開した商業活動で、七つの海を股に掛け、広く世界に打って出て、次第に多様性の認識を持つ海洋国となっていったことには、大きな意味がある。様々な土地に生まれた多種多様な文化遺産を保存し、その魅力を分かち合いたいという願いが生まれるのと時を同じくして、それを享受し鑑賞することができる多くの受け手が存在するようになったこと、これがイギリス国内で、優れた動物園や植物園、そして博物館等の施設建設のムードを盛り上げていったことは確かだからである。資産を持つ人々の間で、珍しい動物や植物、そして文化的遺産を収集し、しかるべき施設に、自分の名を冠したコレクションとして寄贈することが、一つのブームを形作るようになった。こうしてロンドン動物園、キューガーデンズの植物園、そして大英博物館等の公共の施設が次々に生まれてゆく。古来為政者たちは、多くの絵画骨董の美術品を集めては、彼らの力を誇示してきた。ロシアのロマノフ王家の至宝が集められたエルミタージュ美術館、フランスのブルボン王朝のシャンゼリゼー宮の美術収集品の数々等が、直ぐに頭に浮かんでくることだろう。しかし公共の施設としては、ロンドンの大英博物館に匹敵するのは、僅かにパリのルーブル美術館ぐらいのものなのである。このように、より多くの人々と収集品を楽しむというゆとりは、その国の文化を支える市民階級の成立と、独自の文化を求める彼らの欲求が高まってこないうちは、起こってはこない現象なのである。イギリスとフランスの首都で偉業を誇る二大博物館は、そんな意味からも、近代国家の誕生を謳歌する金字塔であったと言えるだろう。その上にまた、文化的遺産を集めてくる鑑識眼、運搬にかける労力、それらを分類し、並べ、保管する努力と財力の膨大さを考えると、まさに呆然とせざるを得ないような、国家を挙げての努力の結晶であった。大英博物館の、群を抜いて大がかりな文化遺産の収集については、一方には国際的犯罪だという覚めた見方もあるものの、そのままに放置していたならば起こったに違いない、文化財の四散消滅の運命を想像すると、彼等の保護・保存の努力には敬意を表さざるを得ないであろう。日々失われてゆくものに対する哀惜の情と、何とかしてそれらの痕跡を残しておきたいという願い、当然そうしなければならないという義務感こそ、英国の身分の高い者たちが持ち続けた精神的特権意識であり、新しく台頭してきた市民階級の憧れの姿勢の一つであったのである。

ゲスト夫人として生きた前半生での、まさに不可能と思えるような偉業、『マビノギオン』の英訳の仕事とても、シャーロットの終生感じていたこの義務感と自己実現の願いから生まれたものであった。そんな彼女はまた、功なり名遂げたシュライバー夫人としての後半生で、それまでに獲得したあらゆる資力と能力を駆使してのコレクションの仕事の中でも、この職務の遂行に動しんだのではないだろうか。シャーロットが収集した膨大な陶器、扇、プレイング・カード類から、この一

人のヴィクトリア朝の貴婦人を突き動かした衝動の結果としての、コレクションの様相を分析してみたい。

A. イギリス陶器を追って

—コレクションの旅—

それまでの18冊にのぼるジャーナルに代わって、シャーロットが1869年から使用するようになった、携帯に便利なより小型の柔らかい表紙の日記は、あたかも「陶器覚書」の感がある。このとき以来シャーロットは、専らヨーロッパ各地を回っての陶磁器収集の旅の覚書で埋まったジャーナルをつけ始めるからである。もともと、様々な種類のものを集めたり、統計をとったり、日記をつけたりと、その形態こそ異なれ、数え上げ、照合し、種分けする作業が、いっそう盛んに行われるようになったことも、この時代の特徴であった。シャーロットのダウレスの町で始めた化石の収集から、陶器類を集めることへの興味の変化は、彼女の生産性と効能を重んじる実業家生活から、余暇を楽しむ優雅な隠遁生活への切り換えを意味しているかのようにも見える。しかしよく考えてみるならば、背後に流れる彼女の思想は終始一貫しており、さしたる変化はないのである。何事にも精一杯、全力投球で取り組むこと、しかもその活動は、専門家のそれというのではなく、あくまでも趣味人の余暇の仕事という面目が立つものであることが求められていた。内情はともあれ、外見だけはともかくも常に平静をたもち、全てを優雅に取り仕切ることが、貴族階級の人々の仕事には、絶対必要な条件であったからである。実務の第一線から引退し、シュライバー氏との静かな、安定した生活を始めたシャーロットが、本来の自分を取り戻しての、生き生きとした暮らしぶりを始めたことがしのばれる。しかしながらこの趣味を追っての生活といえども、決して怠惰な暇人のものとは考えられない。コレクションに対するシュライバー夫妻の傾倒ぶりは、到底半端のものとは言えないものだからである。その一例をジャーナルの記事から、追ってみよう。

ある収集の旅では、二人は朝3時にドイツのブレーメンに到着し、4時に就寝したのも束の間、早朝から待ち構えていた取引業者の訪問を受ける。翌日、早くも夫妻の姿はハンブルグにあり、既に情報を得ていた14軒を回って、盛んに買い付けを行なっている。宿に帰ってくるやいなや、その日買い求めた陶器類を調べ上げ、洗浄し、それぞれについての入念な記録を取る。その作業が済むと次の目的地への旅行計画を立て、照会の手紙を書く。その傍ら自宅でのセールを企画し、子どもたちの家族や友人たちの依頼に従って買い入れた品物には、適正な手数料を試算するという忙しさであった。前述した如く、当時から盛んに行われるようになった、クリスティー、サザビー、フィリップス等のオークションナーたちの依頼による、買い付けを引受けたりもしている。1872年5月には、磁器とエナメル製品132点を、200ポンド余りで売りさばいたという記録も残っている。

ヨーロッパ中を駆けめぐった収集の旅を終え、イギリスへの帰国の途上で、パリの封鎖事件が勃発し、フランス・プロシア戦争 (Franco-Prussian War) の終結、1871年3月25日のフランス第三共和国の誕生、パリ・コミューンとして知られた社会主義政権樹立等の事件も起こっている。まさに激動のヨーロッパを駆け抜けての、命懸けの収集活動を続けていたのである。こうして集められた、シュライバー夫妻の磁器のコレクションは、まことに多岐にわたっている。1744年、イギリスにおける最初の磁器工場を設立した、優れた銅板彫り師E. ヘイレン (Edward Heylyn) とT. フライ (Thomas Frye) のエセックス州、ボウ (Bow) の磁器がある。彼らの製品はニュー・カントン (New Canton) 風として知られた、クリーム色の地に小枝をあしらった模様が浮きでる磁器であった。1750年から52年にかけての初期の作品と、マイセン (Meissen) の影響が濃厚に表れてくる、1755年から58年にかけての作品の数々が含まれている。その中には、プロシアの宮廷の貴婦人

に投げキスを送る、ポーランド王オウガスタスの絵柄を配した磁器もあり、夫妻がこれを、1873年にドレスデンで、5ポンドで手に入れたという記録が残っている。1749年に設立されたブリストル(Bristol)工場の磁器のコレクションも含まれる。クリーム色の薄地のチェルシー(Chelsea)工場の磁器の数々は、夫妻がことのほか気に入っていたものであった。中でも、1742年から56年にかけて作られたと想定される、大きなウサギの形をした蓋付き深皿は、1876年にロッテルダムで、4ポンドで購入したもので、「手荒く扱われていたとみえて傷んでいる。でもとても典雅な作品」と記録されている。チェルシーの「小物(toys)」と呼ばれた小さな作品の中には、1760年頃の作と考えられる、花籠を抱えた少女の姿をした香水瓶が含まれている。これは夫妻が7ポンド12ペンスで、パリで購入したものである。1770年にこのチェルシー工場は、ダービーの工場によって買収され、従来のチェルシー様式は排除され、抑えた色調の磁器が支配的となってゆく。「十分の一税の子豚」(The Tithe Pig)と呼ばれている磁器は、十分の一税として収めるはずの子豚に代わって、自分の赤ん坊を、坊さんに差し出す農夫の妻の姿を中心に据えた群像である。この美しい彩色の施された飾り物の磁器は、重税に追い詰められた農民夫妻の悲しみが込められた、何とも胸詰まされるチェルシー&ダービー工場の作品であり、1882年、4ポンドで購入されたと記されている。マイセンを模した像を作っていたダービー(Derby)工場の磁器もある。また深いブルー系の色を背景に使う、スタッフォードシャーのロングトン・ホール(Longton Hall)工場の磁器がふくまれている。その他1745年から55年にかけて、本物の陶土が発見され、W. クックワージー(William Cookworthy)のもとで製品を作ったプリマス(Plymouth)工場の磁器の数々や、ストウク・オン・トレント(Stoke-on-Trent)で工場を設立したジョサイア・スポウド(Josiah Spode: 1733-87)の作品(しかしながらこの工場での磁器の制作は19世紀の初期に入ってからで、シャーロットの好みには、少々新しすぎると写っていたらしい)、1764年にスオンジーに設立されたウェルシュ・スオンジー(Welsh Swansea)工場の磁器(ただしここでの磁器作製は1814年からである)、1751年に設立され、翌年にブリストル工場と提携し、1765年から75年にかけては、専ら東洋的なデザインを使っての制作を続け、1760年にチェルシーの絵付け師が参加することによって、精巧な絵柄を使った磁器の制作に成功する、ウースター(Worcester)の磁器のコレクションも含まれている。この工場の磁器は、18世紀後半にマイセンに代わって、ヨーロッパに君臨することになったフランス王家の工房セーヴル(Sèvres)の、1780年代に流行した新古典的絵柄と、1783年頃からT. フライト(Thomas Flight)が導入した現代風セーヴルの絵柄で人気を博していた。以上ざっと見てきたことから分かるように、彼らの収集は、まさにイギリス磁器の歴史と広がりを迎える、実物教育が可能となるような、一大コレクションとなっているのである。

一方陶器の収集にも、目を見張るものがある。ランベス(Lambeth)、ブリストル・デルフト(Bristol Delft)、フルナム・ストーンウェア(Fulham Stoneware)、塩釉薬で仕上げられたスタッフォードシャー(Staffordshire)などの製品と並んで、最も名高いものは、ジョサイア・ウェッジウッド(Josiah Wedgwood: 1730-95)の工場制作の磁器の収集であろう。初めはストウクの地で兄と共に徒弟として働き、腕を磨いたジョサイアは、やがて鼈甲を使った陶器を作っていたスタッフォードシャーのT. ウィールドン(Thomas Whieldon)と組んで仕事を始め、見事な緑色の釉薬を使った陶器で市場を独占してゆく。1769年には、従兄弟T. ベントレー(Thomas Bentley)と共同で、装飾用の陶器の大量生産を手掛けるエトルウリア(Etruria)工場を設立し、「カリフラワー」('cauliflower')と名付けた緑と黄色の釉薬をかけた製品を作り、また1765年頃からは、クリーム色のクイーンズ・ウェア(Queens Ware)を制作し、エナメル加工を施したりしている。彼らのコレクションには、ウェッジウッド製のルイ十六世(Louis XVI: 1754-93)とマリー・アントワネッ

ト (Marie Antoinette : 1774-93) の肖像画を配した、二つの飾り額が含まれている。これはルイ十六世があるイタリアの家族に与え、それを買い取ったフランディン夫人 (Mme Flandin) から、19ポンドで購入したという曰く付きの代物である。シャーロットは「法外な高値が付いている、けれど素晴らしい作品」と記録している。

普通エナメルで覆われた銅を使って制作される絵付けエナメルは、15世紀頃にイタリアの各地で作られ、後にリモージュ (Limoges) 等を中心に、フランスへと広がっていった、持て囃されるようになる作品である。やがて18世紀の初め頃には、ドイツでも、嗅ぎ煙草入れなどの小さな身の回りの品が制作されるようになる。イギリスでの制作が始まったのは、18世紀の中頃、バターシー (Battersea) でのことである。バターシー・エナメルと称するこれらの作品を制作していた工房は、ロンドンのバターシー地区のヨーク・ハウスにあり、1753年から56年までは、T. ジャンセン (Theodore Janssen) によって運営されていた。シュライバー・コレクションには、ヒベルニア (Hibernia) に林檎を捧げるパリス (Paris) の壁掛け額、燭台一対、彩色されたエナメルの掛けくぎの数々等が含まれている。また1740年から50年にかけての、ごく初期に制作されたと推定される、蓋にエナメルの絵付けが施された日本風の嗅ぎ煙草入れや、1760年から80年代制作の大メダルの数々等、スタッフォードシャーのブリストン・エナメル (Bliston Enamel) の製品も含まれている。一方シュライバー・コレクションに集められたワイン・グラスは、全てジャコバイト・グラス (Jacobite glass) と呼ばれているもので、18世紀にスチュアート家 (The House of Stuart) を密かに支援していた社交界の人々のために、作られたグラスであった。1822年にシャーロットは、タータンの衣装を身につけた、1750年頃のプリンス・チャールズ (Charles Edward Stuart) の姿が描かれたグラスを、ウースターで、60ポンドで購入している。

しかしながら、愛着が深かったこのコレクションを手放すことは、シャーロットにとって辛いことでもあった。彼女のジャーナルには次のような記載が残っている。

「1885年11月19日。10時前に、サウス・ケンジントン博物館から保管係の人達がやって来て、一日中作業をしました。彼らはボウの全ての磁器とチェルシーの大部分の磁器を箱に詰め、運び出したのです。私は終日、荷造り係に付き添っていました。今やチェルシーの大きな籠は運ばれて行ってしまいました。私はこの悲しい巻を、私のコレクションへの別離の挨拶とともに閉じることにします。」

B. 扇のコレクション

— 社交界の御婦人方の所持品から —

古今東西を問わず、人類と扇の付き合いには深い歴史がある。火を起こす際使われる道具としての役割と共に、暑い気候の国々においては、風を送って暑気をしのぐ道具としても広く利用されてきたからである。記録に止められた扇は、古く紀元前3000年頃と推定されるエジプト壁画の上に描かれた祭式用の扇、そして紀元前1334—25年の、第18王朝ツタンカーメン (Tutankhamen) 王の墳墓から出土した扇などが思い起こされる。ツタンカーメン王の扇は、象牙を使って作られたL字型の柄に、ダチョウ羽毛を張った扇面を持つ見事な扇で、明らかに神性を持った王の権威を謳歌する象徴としての所持品であった。これらの扇はいずれも「コケイド」 ('cockade') とよばれる花形の円形の扇である。これに対して中国系の扇は、細かい襷を折り畳んでゆく形式のもので、その中には日本の檜扇の類も含まれている。古くは十字軍の遠征から始まって、シルクロードを使っての交易やマルコ・ポーロの東洋探検旅行の際の交換物品の中にも、この西洋と東洋の扇が含まれており、お互いに影響を与え合っていたのである。日本の檜扇は、15世紀あたりから、ポルトガルの商人に

よってヨーロッパにもたらされて、主として教会と宮廷の人々への献上品の一つとなっていたと推定される。これらの東洋の扇に影響を受けて、ヨーロッパで最初に大々的に制作を手掛けたのは、イタリアの職人たちで、16世紀に入ってからのものであった。やがてフェラーラやヴェニスの上流階級の婦人たちが愛用してこの扇文化は、一つのファッションとして、フランスの宮廷へと伝えられる。あのキャサリン・ド・メディチ (Catherine de' Medici : 1519-89) が、初めて羽毛の扇を、イタリアからフランスへ紹介したと言われている。折り畳み式の扇が流行りだしたのは、彼女の息子アンリ三世 (Henri III) の治世の時代からのことである。17世紀後半になると、扇職人たちのギルド (組合) が組織され、1709年には、ロンドンにも扇職人一団の組合が生まれた。やがて18世紀の20年代までには、扇はレースの縫い取りを施したハンカチーフ同様、イングランドの貴婦人たちのステイタス・シンボルとして、高価な流行装飾品となるのである。ヨーロッパの至る所で、競って多くの扇が作られるが、流行の頂点にあったのは、フランスのマーティン兄弟 (Martin brothers) 工房のヴェルニ・マーティン (Vernis Martin) の小型の象牙ブリセ (brisé) 扇等に代表される、フランス製の扇であった。このように扇にまつわる文化、技術、そして商業との関係は、複雑な歴史と広がりを持っている。分業が進むに連れ、扇の軸の部分と扇面の部分は、それぞれに別々の工房で作製されるようになり、それを一つの完成された製品に組み立てる職人、出来上がった製品を売りさばく商人等の手を通して、婦人の元に届けられるまでには、長い道のりが必要であった。19世紀の中頃になると、飛躍的な印刷技術の発達にもなって可能となった、手の込んだ模様を印刷した扇面を優雅にまとめて作製された、パリに本拠を構えるデュヴェルロア商会 (Maison Duvelleroy) の扇が、世界的な評判をとる。1851年、ロンドンのハイド・パークで開催された大博覧会で、金賞を受賞したのは、このデュヴェルロア商会とユージェニー皇后 (Empress Eugénie) 御用達のアレクサンドル (Alexandre) 工房で作られた華麗な扇であった。当時再興してきたレース工業の技術を生かした、精巧なレース使用の扇面が使われた製品などが市場に現れる。レースの軽やかな素材は、空気の流れの中で優雅に揺れる扇の機能にとっては、まさに打って付けのもので、それを携帯する雅びな上流階級の貴婦人たちの、軽やかで優美なイメージを彷彿とさせるものであったからである。服飾工芸技術の開発と商業化に力を注いだヴィクトリア女王の下で、遅ればせながらこの分野での仕事に励んだイギリスではあったが、パリを中心とするフランスには到底及ばなかった。扇制作の分野においても、フランスのファッションが常に西洋世界を凌駕していたことは明らかである。やがて技術の進歩と市場を得て、多種多様な扇が制作されるようになってゆく。普通に開くと雅びな愛のシーンが、また反対に広げると濃厚な愛の様が展開されるといったような、恋のゲームに浮かれ騒いでいた社交界の複雑な一面を象徴するお遊び用の扇、そして裏面にさまざまな趣味を反映させた、自分だけの個性的な扇なども盛んに作製され、それぞれなやり方で自己を主張する婦人方の必需品ともなる。様々な行事毎の御祝儀扇が、名前入りで人々に配られるという習慣も生まれ、社交界における扇の働きの幅も大いに広がったのである。

レディー・シャーロットのコレクションの中で、最も古いと思われる扇は、ヨーロッパの各国々を象徴する人物が、二人用のカード・ゲーム、ピケット (piquet) に興じているという図柄の扇子である。それぞれフランス、スペイン、そしてサルディニアを表す女性たちが、ザクセン、ロシア、そしてポーランドを代表する人物とピケットのゲームをしている。一方ブリテン、オランダ、そしてプロシアも席についてはいるものの、ただ眺めているだけである。それぞれの人物には、説明の文が添えられている。例えばフランスの婦人は言う、「私が持ち札を持っていますの。だから最初の手を打ちますわ。」、一方でブリテンが宣言する、「ゲームには加わりませんが、用意はできていますよ。イライラさせられれば、すぐに手を打って見せます。」右手の方には、普通の服装をした男

が立ち、ゲームの評価を下している。その後方には馬に跨がったトルコのサルタンとペルシアのシャー (Shah) の姿がある。法王の椅子とおぼしき一つの椅子は、空席になっている。袖に描かれた法王は、椅子が自分を待ってはいるが、ゲームに参加したいと宣言している。このきわめて政治的な戯画は、ウィーンで、ポーランドのJ. ソビエスキー (John Sobieski) が、トルコ人たちを破った事件を描いていて、法王インノセント十一世 (Innocent XI : 1676-89) 時代のものであろうと、長い間、考えられてきた。しかし後からの調査によって明らかにされたのは、これはポーランドの王位継承戦争 (1733-8) を描いたもので、法王はクレメント十二世 (Clement XII), ライバルのザクセン公オウガスタス (Augustus of Saxony) を退けて、ワルシャワで、ポーランド王位に就いた、スタニスラス・レスクジーンキー (Stanislas Leszcynski) の事件が描かれていると言う。するとこの扇の制作されたのは、1734年から5年にかけてのことであろうと推定される。シャーロットは、この数少ない貴重な逸品を、1879年12月に購入したと記している。

コレクションの中には、「オレンジ・ファン」 ('Orange Fan') と呼ばれている扇が含まれている。この扇は、1734年にジョージ二世 (George II : 1683-1760) の長女アン王女が、オレンジ公と結婚したのを祝って、ロンドンのM. ギャンブル工房で作製され、ヨーロッパの王家の貴婦人たちに贈られたという扇である。一羽の鳩が愛の手紙を運び、花の盛りの一輪のバラと実をたわわにつけたオレンジの樹は、花嫁と花婿を象徴し、楽譜を添えられた愛のオードが印刷された扇である。また一方では、1790年に亡くなった、ジョージ三世 (George III : 1738-1820) の弟カンバーランド侯の死を悼む弔問用の扇なども含まれている。また1954年9月、トーマス・オズボーン氏 (Thomas Osborne) の家鴨狩りパーティーの記念扇などというものもある。オズボーン氏は、良く知られたロンドンの本屋で、新しく居を構えたハムステッドの近隣の人々への、引っ越し記念の狩りの集まりの際配られた、引き出物と思われるのである。また1745年のジャコバイト反乱 (Jacobite Rebellion) を記念する扇や、イベリア半島戦争を記念する扇の数々も集められている。ゲスト家の跡取り息子、長男のアイヴァーとコーネリア・チャーチル (Lady Cornelia Churchill) の結婚を意識してか、マールバラ公爵 (Duke of Marlborough) 家の先祖たちの功績を描いた扇も、6本集められている。1797年のオペラ・ハウスの模様を描いた、オペラ広告用の扇もある。1883年9月、バースで求めたという扇には、彼女の夫シュライバー家の大祖父の、三番目の妻の名が付いた婦人の姿も描かれており、それに興味を覚えて手に入れたものらしい。

C. プレイング・カードのコレクション

— 社交界の遊びの小道具を集めて —

レディー・シャーロットのもう一つのコレクションとして有名なものは、大量のプレイング・カード類の収集である。社交界の遊びの一つとして使われ始めたカードには、占いやタロットカード等のコレクションもあるが、政治や世相を風刺したプレイング・カード類は、当時の社会を理解する上でも、まことにユニークな証拠品として評価されている。中には、1720年の「全ては泡に」 ('All the Bubbles') カード一式とか、1710年のサッチヴルル博士の裁判 (Trial of Dr Sachaverell) や「法王陰謀の全て」 ('All the Popish Plots') カード一式といった、きわめて政治的な出来事を描いたものも含まれている。1828年のイギリス制作のカードには、ロンドンのE. オリヴァッテ (E. Olivatte) 工房発行の、ホメロスに登場してくる人物の早変わりの様を扱ったカードもある。より新しいイギリス制作の45枚のカードは、「議会ゲーム」と名付けられ、保守系と革新系の二手に別れて争われるカード・ゲームで、それぞれのカードには議員の肖像が描かれている。これらのカードは、コーネリアの兄ランドルフ (Randolph Churchill) とグラドストーン (Gradstone) がゲームの

先導をして始められるカード遊びで、使われていたらしい。珍しいものとしては、全部並べるとバステューユ (Bastille) 監獄の形となる、31枚の三角形のフランス革命のカード等が含まれている。

シャーロットはまた、手さきの仕事を大切に考える女性でもあった。19世紀の後半から、再び盛んに取引されるようになった、ブリテン島のレース作りの仕事にも関心を示し、50人の貧しい地方の女たちの自立のために設立された、ヴェニスの国立レース学校の様子を見学したりしている。また1886年には、74歳の高齢に達したこの貴婦人が、写真の技術を学ぶために、リージェント・ストリート工科大学へ、受講の登録をしているのも興味深い。トルコ難民の救援活動等の対外的慈善事業の他にも、一日中車を走らせ、満足な温かい食事を取ることもままならぬロンドンのタクシー運転手たちのために、街の中に小さな休息用のシェルターを作ったりする運動にも手を貸している。1891年2月22日、視力を失い、自分の書いた記述を読むことも困難になったシャーロットは、長年の友でもあったジャーナルへの別れを告げる。思えば1822年の少女時代から、70年にわたっての同伴者ともいうべき手帳との別れであった。1891年2月22日のジャーナルの記録は、そんな彼女の気持ちを次のように伝えている。

「—こんなに長い間つけてきたジャーナルをここで閉じたいとおもいます—もう自分の書くのを見ることも、書いたものを読むこともできなくなったからです—一日増しに体は弱っていくとはいえ、まだまだ健康に暮らしていただけることを神様に感謝します—そして私の最後がそう遠いものではないことを感じます—愛しい者たちによってこれ以上無いように大切にされ、そうしてくれることで彼らを祝福しています…。さあ今これら全てにお別れの挨拶をおくります。」

以後のシャーロットの毎日は専ら、コレクションのカatalog作りと、タクシーの運転手たちに贈る赤いウールのマフラーを編む仕事に没頭する日々であったと言う。

1895年1月15日、カンフォードの館で、レディー・シャーロットはこの世を去った。1812年、奇しくもあのヴィクトリア朝を代表する小説家C. ディケンズ (Charles Dickens : 1812-70) の生まれた年に、スタムフォードに近いウフントン・ハウスで誕生した、女の赤ん坊の誕生には鳴りを潜めていた鐘も、1895年、カンフォードの館での年老いた未亡人の死には、半鐘を鳴らし、半旗を掲げたのである。この年は、あの精神科医S. フロイド (Sigmund Freud : 1856-1939) が、最初の精神分析学の本を出版した年でもあった。

「タイムズ」 ('The Times', 16 January 1895) の死亡記事には、『マビノギオン』への言及はなく、専ら彼女の後半の活動—コレクターとしての才能、最近の著書、そしてロンドンのタクシー運転手やトルコ人亡命者たちへの支援に言及している。それに反して、多くのウェールズ紙は、彼女のゲスト夫人としての前半生—ダウレス鉄鋼業への貢献と、「現代のロマンス作品の真の基礎」を作った『マビノギオン』の翻訳等の仕事を讃えるものとなっている。そんな中でも、「カーディフ・タイムズ」 ('The Cardiff Times', 19 January 1895) は、ダウレスの労働者と家族たちの生活環境の改善と、彼らの教育の充実に終始心を砕いてきたシャーロットへ、尊敬と愛情を捧げている。そして「プール&ボーンマス・ヘラルド」 ('The Poole and Bournemouth Herald', 17 January 1895) は、次のように彼女の生涯を概括しているのである。

「今世紀の最も優れた、そして最も驚くべき婦人の一人である。—優れた芸術的センスと文学的才能を持つと共に、大きな事業に成功するために、全ての経営者に不可欠な能力をあらゆる側面で備えた婦人であった。」

レディ・シャーロットには、ウェールズとインクランドの二つの土地で、二人の夫と過ごした、二つの人生があった。一つはゲスト夫人として、10人の子どもと42人の孫たちを世に送り出すと共に、産業革命期のウェールズの鉄鋼業を切り盛りした女実業家、そしてウェールズ幻想文学の傑作、中世散文物語集『マビノギオン』の英訳出版によって、その存在を全世界に知らしめた文学者として生きた、ウェールズでの生活である。そしてもう一つはシュライバー夫人として、イギリスの陶磁器と扇とプレイング・カードの大コレクション作りに勤しんだ、イギリス社交界の貴婦人の生活である。教育を通してウェールズの人々の福祉と安寧に心を砕き、彼らの魂の書ともいべき『マビノギオン』の紹介者でもある、ゲスト夫人シャーロットは、今では第二の夫シュライバー氏と並んで、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館の139室の入り口に掲げられた、モザイク細工の肖像画の上に、新妻の幸せの微笑みを留めつつ、二人の陶磁器の大コレクション——シュライバー・コレクション——を見守っている。

鉄とロマンスと磁器を求めての、喜びと悲しみに華麗に彩られた、83年にわたる希有な婦人の一生——それはまた、いずれの生をも、手を抜くことなく、精一杯に真摯に生きたことにより、生来その身に備わっていた、身分の高い者が持つ道徳観 (noblesse oblige) を広く世に示した、ヴィクトリア朝の貴婦人の一生であったのである。

1) 本稿は、「大妻女子大学文学部30周年記念論集」所収、「あるヴィクトリア婦人の肖像(1)」に続くものである。

Selected Bibliography

- Alexander, Hélène. (1995) *Fans*. Shire Publications Ltd.
- The Earl of Bessborough. (1950) *The Diaries of Lady Charlotte Guest—Extracts from her Journal 1833–1852*. John Murray.
- (1952) *Lady Charlotte Schreiber—Extracts from her Journal 1853–1891*. John Murray.
- Cust, Lionel. (1893) *Catalogue of Collection of Fans and Fan Leaves, presented to the Trustees of the British Museum by Lady Charlotte Schreiber*.
- Guest, Montague. (1911) *Lady Charlotte Schreiber's Journals, Confidences of a Collector of Ceramics and Antiques*. 2vols. The Bodley Head Press.
- Guest, Revel and Angela V. John. (1921) *Lady Charlotte : A Biography of the Nineteenth Century*. W. Spurrell & Son.
- Schreiber, Lady Charlotte. (1885) *Catalogue*. Eyre & Spottiswoode.
- (1880–90) *Fans and Fan Leaves*. John Murray.
- (1892–95) *Playing Cards of Various Ages and Countries*. John Murray.
- Wrenn, Dorothy P. H. (1976) *Welsh History Makers*. EP Publishing Limited.